

子どもが多面的・多角的に考え、自己の生き方について考えを深める授業づくり

岩船村上支部 村上市立朝日みどり小学校

大黒 晃典（平成29年度）

主張

児童がこれから大人になる際に様々な問題に直面することが予想される。そこで、児童が問題をよりよく解決していくためには、一つの見方・考え方ではなく、様々な見方・考え方で物事を考える力が必要になると考える。一人一人の道徳性を養う道徳科の学習で、これからよりよく生きていくために大切なことを考えさせ、自己の学びとして獲得させたい。

この思いから、これまでの道徳科の授業では、児童が多面的・多角的に考え、自己の生き方について考えを深められることをねらいとし、授業改善に取り組んできた。特に、教師が行う発問に着目してこれまで実践を重ねてきた。本実践では、テーマ発問を軸に学習し、展開で「一段深い問い（2 主題の意味で後述する）」をすることで、多面的・多角的な思考を促し、自己の生き方について考えを深めることができると考える。

1 主題設定の理由

永田（2017）は、道徳科の学習における発問を次のように定義している。

	定義	発問例
場面発問	ある場面において、登場人物の心情や判断、行為の理由などを問うような発問。	〇〇はどんな気持ちか。どう思ったか。 〇〇の心の中はどんなか。
テーマ発問	主題やテーマそのものにかかわって、それを掘り下げたり、追求したりするような発問。	〇〇には、どんな意味があるか。 〇〇は、どんな問題があるか。

現行の教科書の発問例を見てみると、「この時の主人公はどんな気持ちか。どう思っていたのか。」という心情を明らかにする場面発問が多い印象を受ける。こうした発問が多い授業では、主に教材を読み取るだけで、多面的・多角的に思考することが少なく、自己の生き方についての考えが深まらない。また、展開の後半にテーマ発問を行うものもあるが、児童にとっては唐突な発問であり、自身の体験と結び付けて考えるのは難しいと考える。

これらのことを踏まえて、昨年度は「テーマ発問を軸とした自己の考えを深める授業づくりの工夫」と題して、学習課題を児童とテーマ発問の形で設定し、それを軸に学習するという実践を行った。この実践から、テーマ発問を軸に学習することは、児童が道徳的価値について理解を深める上で有効だと分かった。さらに、導入で道徳的価値に対する児童の考えを引き出すことで、終末の振り返りとの比較を通して児童の変容を見取ることができた。

一方で、展開の過程において児童の思考が想定したものにはならず、一部教師主導となったり、授業時間が足りなくなったりするなどの課題が残った。

そこで、今年度は学習課題をテーマ発問の形で設定し、それを軸に学習することに加え、展開で「一段深い問い」を取り入れることによって、子どもが多面的・多角的に考え、自己の生き方について考えを深められると考え、主題を設定した。

2 主題の意味

多面的・多角的に考える姿とは、道徳的価値の学習を通して様々な視点から考えたり、立場を変えて考えたりすることで、物事を一面的に捉えずに多様に考えることだと考える。本実践では、授業で扱う道徳的価値から別の道徳的価値を関連させた考えを引き出し、一人で考えずとも、ペア交流や全体交流の際に「こんな考え方もある。」「あんな風に考えることもできる。」と児童が考えを広げられるような授業展開を心掛けたい。

自己の生き方について考えを深める姿とは、「いい家族は、助け合っている家族のことだと思っていたけど、今日の学習を通して、お互い信頼していて、時には見守ることも愛情ある家族の姿だと分かった。」というように道徳的諸価値について理解したり、「これまで友達とけんかをした時に認められないこともあったけど、これからは正直に話して謝るようにしたい。」というように、今後の未来を見据えて、よりよい生き方を実現していこうとする願いや思いをもったりする姿と考える。

これらの児童の姿を実現するために、テーマ発問と一段深い問いを手立てとして、次のように授業を進める。

導入	① 学習する <u>テーマ</u> を提示し、それに対する自分の考えを引き出す。 ② 引き出した考えを揺さぶり、 <u>テーマ発問</u> …(1)の形で学習課題を立てる。
展開	③ 教材の場面把握を簡単に行い、 <u>一段深い問い</u> …(2)を中心発問として行い、それについて考えることを通して、テーマについて理解を深める。
終末	④ 学習課題に立ち返り、本時のまとめを行う。 ⑤ 振り返り

本実践に向けての構想

(1) テーマ発問について（児童が自己の生き方について考えを深める手立て）

本実践では、本時で扱う道徳的価値に関係する言葉（以降、テーマと呼ぶ）を、道徳科の指導要領解説を基に児童の実態や扱う教材の内容を考慮して1つ設定する。授業の導入では、設定した言葉を学習するテーマとして提示し、それに対する考えを引き出す。その後、児童と学習課題をテーマ発問の形で設定し、それを軸に学習する。

(2) 一段深い問い作りについて（児童が多面的・多角的に考える手立て）

本実践では、③のように「一段深い問い」を中心発問に設定する。永田(2017)によると、「一段深い問い」とは、「初発の感想ではたどり着かないような考えを誘う問い」のこととされている。私は、「一段深い問い」をすることで、**児童が道徳的価値に関する自身の生き方や願い、思いに結び付けて多面的・多角的に考えることを促し、児童から多様な考えや前向きな見方・考え方を引き出すことができる**と考えた。そこで、事前に教材を読ませて感想を聞いて児童の考えや実態を探り、学習のねらいを達成する上で有効か、多面的・多角的に思考する際に関連する道徳的価値は何かを併せて考えながら一段深い問いを作って行く。その後、この発問に対して児童に議論させたことを基に、テーマについて理解を深めていく。

3 実践方法

次の2実践を行い、全体的な児童の様子から多面的・多角的に考えたか、振り返りや抽出児の反応から自己の生き方について考えを深めたかを見取ることによって手立ての有効性を探った。各実践の対象と実施教材は次の通りである。

	対象	実施教材と扱う道徳的価値
実践Ⅰ	村上市立朝日みどり小学校6年生13名	「だから言ったのに」(A3 節度、節制)
実践Ⅱ	村上市立朝日みどり小学校6年生12名	「おばあさんの新聞」(B8 感謝)

※ 抽出児について

道徳科の学習における評価が個人内評価であることから、各実践で扱う道徳的価値から学校生活等を踏まえて抽出児を選出し、授業中の発言や話し合いの様子、ノート記述から変容があるかを見取った。

4 各実践に向けての構想と授業の実際と考察

(1) 実践Ⅰ 「だから言ったのに」(A3 節度、節制)

ねらい 普段から人の話をしっかりと聞かないために失敗する順一に対するアドバイスを考えることを通して、自分の生活習慣を見直す態度を養う。

実践に向けての構想

① テーマについて

見直したい生活習慣は、児童によって様々であると考えた。そこで、自分の生活習慣について見直すきっかけとしたかったため、「節度、節制」についての考えられるテーマの中から、「生活習慣」という広く捉えられるテーマにした。

② 一段深い問い作りについて

事前に読ませた後の児童の感想は次の通りだった。

- ・(失敗した順一に対して) まあそうなるよね。 ・自分と順一が似ている。(A児)
- ・話を聴かない順一が悪いよね。 ・洋子の気持ちも分かる気がする。

これらの感想から順一が話を聞かずに迷惑をかけることや洋子が困ることが児童の印象に残ったと考えた。また、教材の内容も含め関連する道徳的価値は、「友情、信頼」「規則の尊重」と捉えた。これらのことから、「はいはい。」と口癖のように聞き流す順一に対して「その場に自分がいたら、順一さんにどうアドバイスをしますか。」と問うことにした。

授業の実際

テーマの導入…自分の生活習慣に点数をつけると何点ですか。理由も考えましょう。

児童の話から、普段の生活を想起して自分なりに点数を付けていた。点数が低くなる要因は、児童によって様々であった。A児は、メディアの使い方、早寝早起きに問題意識をもち、癖になってしまっていたため85点にしたと発言していた。A児の発言や他の児童の発言を基に、生活習慣はできないこともあるけど、できた方がいいことばかりだということを学級で確認し、学習課題を「よい生活習慣に直すにはどうしたらよいか。」と設定した。

一段深い問い…その場に自分がいたら、順一さんにどうアドバイスをしますか。

始めは、どんなアドバイスをして「はいはい。」と言われてしまうかもしれないと思い、考えをもてない児童が多かった。しかし、順一の直すべきところを考えながら、単なる注意ではなく、順一がよりよく生きることを念頭に、心に響くアドバイスを自分の言葉で考えていた。A児は「はいはいって言っていたら、いつか

だらしのない大人になって、みんなを困らせてしまうよ。」と記述しており、ペア交流と全体交流ともに積極的に伝え合っていた。右の写真は、板書の一部である。児童自身の生き方や願い、思いによって考え方は異なり、他の道徳的価値に関する考えも出た。



終末と振り返り

児童から出たアドバイスがどのような考え方を基にしているのか分類した。その後、自分の生活習慣を見直す上で使えるような考え方に挙手させたところ、バラバラであった。そこで、学習課題や学んだことを意識して振り返りを記述させた。右の文章は、A児の記述である。下線部からは、「失敗から学ぶ」という新たな道徳的価値に気付いたり、未来を見据えて前向きに考えたりしたことが分かり、自己の生き方について考えを深めていると考えられる。同様に、児童の振り返りから自己の生き方について考えを深めていると判断できた児童は、13名中12名いた。

ぼくは、今日の授業をするまでメディアや寝る時間はまあいいやと思っていたけど、アドバイスを伝え合ってみて、未来のことを想像したり、失敗から学んだりしたいと思いました。今は85点だけど、明日からは90~95点を目指していきたいです。

考察

- 一段深い問いに対して、すぐに考えがまとまらなくても時間いっぱい真剣に考えたり、ペア交流で考えをしっかりと聞き合ったりする児童の姿が大変多かった。その後の全体交流では、別の道徳的価値である「友情、信頼」「規則の尊重」を関連させた考えや未来を想定した考えなど、様々な視点からの多様な考えを引き出すことができた。これらの児童の様子から、一段深い問いが多面的・多角的に考える上で有効に働いたと考えられる。しかし、一段深い問いにより、多様な考えを引き出すことはできたが、終末で考えをまとめることができなかった。「(学習課題の)よい生活のよいつてどういうことか。」のような問い返しをすることで、考えを収束させ、よりよいまとめに繋げることができるとは思えない。
⇒ 次の実践では、一段深い問いについて考えた後で、さらに揺さぶりをかける問い返しをすることでまとめに繋げたい。
- 学習課題や学んだことを意識させた振り返りでは、ほとんどの児童がそれぞれ考えた生活習慣の見直す方法を記述していた。A児の記述からは、普段の生活習慣を振り返り、「失敗から学ぶ」という友達の考えから自己の生き方について考えを深めたことが分かった。これらのことから、テーマ発問の形で学習課題を設定し、それを軸に学習したことは、児童が自己の生き方について考えを深める上で有効に働いたと考えられる。

(2) 実践Ⅱ 「おばあさんの新聞」(B8 感謝)

ねらい おばあさんがどんな思いでてつおに優しくしたのかを考えることを通して、相手に感謝をし、思いに応えようとする態度を養う。

実践に向けての構想

① テーマについて

「感謝」の中から複数の関係する言葉が考えられるが、特に、展開の中で「相手の思いに応える」ことについて考えさせたかったため、関係の深い「支え合い」というテーマにすることで、主人公を支えてくれたおばあさんに着目できるようにした。

② 一段深い問い作りについて

事前に集計した Google フォームを用いたアンケートでは、次のような感想があった。

- ・ どうして新聞配達をしたいのか。 ・ どうしてそんなに新聞を読みたいのか。(B児)
- ・ 朝から新聞配達を自分からしててえらい。(B児) ・ 5年生で働くなんて、すごい。
- ・ おばあさんは優しい。

これらの内容から時代背景の知識が乏しい児童が多いことやおばあさんの様子から優しいと感じ取ったことが分かった。また、教材の内容も含め関連する道徳的価値は、「親切、思いやり」「個性の伸長」「家族愛、家庭生活の充実」と捉えた。これらのことから、おばあさんの思いを考えさせることで多様な考えを引き出せると考え、「どんな思いでおばあさんはてつおに優しくしたのですか。」と問うことにした。

授業の実際

テーマの導入…誰に支えられていますか。感謝を伝えてみてどんなよさがありましたか。

児童からは家族、友達、先生方、地域の人という考えが出た。感謝を伝えることのよさを問うと、2学期始めに行われた陸上記録会の経験から、心がスッキリして気持ちがいいこと、B児からは自分も相手も嬉しくなることが挙げられた。その後、支えてくれる人へ感謝を伝える以外にできることはないかと問うと、全く意見が出てこなくなったため、学習課題を「自分を支えてくれる人に対して何ができるか。」と設定した。

一段深い問い…どんな思いでおばあさんはてつおに優しくしたのですか。

展開の始めで、事前にとった感想を取り上げ、おばあさんを優しいと感じた様子について話し合った。B児は、他の児童の発言に納得して頷いていた。その後一段深い問いをして考えを記述させると、B児は「てつおが毎日来ることが楽しみで、てつおに会いたい。新聞を読ませてあげたい。」と記述していた。その後の全体交流では、児童から様々な考えが挙げられた。児童の考えからお互いに家族に似た愛情があることやおばあさんがてつおにえらい人になってほしいといった願いをもっていること、好きな新聞を読み続けてほしいことなど別の道徳的価値に関連させた考えが挙げられた。



その後、てつおは亡くなったおばあさんに感謝を直接伝えることはできないことを確認し、何ができるのかと問い返すと、ねらいである「相手の思いに応える」ことの具体的な姿が挙げられたため、まとめに繋げた。

振り返り

学習課題や学んだことを意識して振り返りを記述させた。右の文章は、B児の記述である。下線部からは、未来を見据えて考えたり、「感謝を行動で表す」という新たな道徳的価値に気付いたりしたことが分かり、自己の生き方について考えを深めていると考えられる。同様に、児童の振り返りから自己の生き方について考えを深めていると判断できた児童は、12名中11名いた。

今までは、自分のことを支えてくれている人のことをそんなに考えていなかったけど、これからは、自分を支えてくれる人に感謝を行動で表して、感謝を伝える。

考察

- 一段深い問いに対して真剣に考える児童が多かった。また、自分の考えを記述できない児童が数名いたが、その後のペア交流や全体交流で友達の考えを聞いて納得する様子が見られた。挙げられた児童の考えから、「親切、思いやり」「個性の伸長」や愛情に関連させた考えが出てきた。これらのことから、一段深い問いが多面的・多角的に考える上で有効に働いたと考えられる。
- てつおは亡くなったおばあさんに感謝を直接伝えることはできないことを確認し、他に何ができるのかと問い返すことで、それまで考えたおばあさんの思いに応えるという考えを引き出し、まとめに繋げることができた。
- 学習課題や学んだことを意識させた振り返りでは、ほとんどの児童が感謝を行動で表すことや、相手の思いに応えることを記述しており、新たな道徳的価値に気付いていることが分かった。このことから、テーマ発問の形で学習課題を設定したことは、児童が自己の生き方について考えを深める上で有効だったと考える。

5 まとめ（成果：◎、課題：△）

- ◎ 教材を事前に読ませて感想を聞き取ることで、児童の考えや実態を知ることができた。学習のねらいを達成する上で有効か、多面的・多角的に思考する際に関連する道徳的価値は何かも併せて考えて一段深い問いを作ることにより、多様な考えを引き出すことができ、多面的・多角的に考えさせることができた。さらに、児童の学習意欲を高めることもできた。また、一段深い問いについて考えた後で、さらに揺さぶりをかける問い返しをすることで、それまでの考えを収束させ、学習のまとめに繋げることができた。
多面的・多角的に考える姿を扱う道徳的価値から別の道徳的価値に関連させて考える姿と捉えたが、今後は他の姿の場合でも一段深い問いが有効かどうか実践を重ねながら探りたい。
- ◎ 授業の始めにテーマを提示することで、授業で学ぶ方向性を定めることができた。教材を読んだだけでは、扱いたい道徳的価値が定まらない場合もあるため、有効だと考える。また、テーマ発問の形で学習課題を設定し、それに対して学習のまとめをしたり、学習課題や学んだことを意識させて振り返りをさせたりすることにより、児童が道徳的価値について理解したり、よりよい生き方を実現していこうとする願いや思いをもったりし、自己の生き方について考えを深めることができた。
- △ 事前にアンケートを取る等をして、児童の実態を把握して一段深い問いを作ることができたが、授業を構想するのに時間がかかった。フローチャートを作成することで、授業の構想を効率よく整理することができ、より成果を出せるようになるのではないかと。

〈引用・参考文献〉

- 永田 繁雄 「これからの道徳教育で特に求められることー道徳教育の改善と充実ー（新潟県立教育センター平成29年度 豊かな心をはぐくむ道徳教育講座 講話・演習用補助資料）」2017
- 『道徳教育』編集部 「考え、議論する道徳をつくる新発問パターン大全集」明治図書出版社、2019
- 文部科学省 「学習指導要領解説 特別の教科 道徳編」東洋館出版社、2017
- 中村 優輝 「直球勝負で問いかける 小学校道徳科授業づくり」東洋館出版社、2022